

令和六年 十一月二日実施

龍谷大学付属平安中学校

ドラゴンテスト問題

受験番号

# 国語

## 解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があったら解答用紙をおもて向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。（問題を持ち帰ることができません）



問題は次のページから始まります

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

素晴らしい短編小説に出会くと、自分だけの宝物にしたくなる。小さいけれどしっかりと造りの宝石箱にしまい、他の誰も知らない場所に隠しておく。

長編小説だとそうはいかない。それは海や川のように世界に横たわっているのです、どこかにしまっておけるはずもなく、大勢の人がいつでも自由に眺めたり泳いだり漂ったりできる。

A 小説との関係はもう少し秘密めているように思う。読書の途中、心打たれるとしばしば私は「何なんだ、これは……」と、感動の声を上げるのだが、B の場合は C に比べてその声の調子がかすれ気味になる。威勢よく机を叩いて叫ぶのではなく、誰かに盗み聞きされないよう用心しながら、自分一人に向かってささやいている。読み終わるとまた宝石箱の中に納め、鍵を掛け、裏庭の片隅にひっそりと湧き出ている泉の底に沈める。

何かの都合で立ち上がれないくらいに疲れ果ててしまった時、海や川のとおりまではとでもたどり着けそうもない時、① 自分の庭に隠しておいた宝物が役に立つ。泉に手を浸し、箱をすくい上げ、掌にのるほどの小さな世界にも、ちゃんと人間の営みが満ちあふれていることを確かめれば、もうそれだけで安心だ。自分はただ一人荒野に取り残されているのではなく、誰かの温もりを守られているのだと実感できる。

今回選んだ『エリザベス・ギルバートの』X (十五歳)の知らなかったこと』は、特に大事にしている作品で、本音を書けばこのままそっと沈めておきたかった。※独占欲から、というだけでなく、② こんなにすごい作品を書かれてしまったら、一体自分は何をどう書けばいいのだろう、と※途方に暮れてしまうのが怖いのだ。

I これは決して派手な小説ではない。腰を抜かすような斬新なテーマを扱っているわけでも、※精巧な仕掛けが張り巡らされているわけでもない。アメリカの地方都市に住む、平凡な十五歳の高校生が、夏休みに経験するある出来事をスケッチする、ただそれだけの小説である。

タイトルにあるとおり、彼、デニー・ブラウンは、世の中についてまだ何も知らない。自分が住む町の名の由来も、※細胞の有糸分裂も、ベートーベンの耳が聞こえなかったことも知らない。看護師である両親の仕事がどんなものであるのか、友だちのお姉さんがどうして自分の手を握ってくるのか、よく分からない。小説のほぼ三分の二は、彼が何を知らないかについての描写に費やされている。

ある日、ささいな偶然が訪れる。友だちのお姉さんが、II 彼の手を黙って握ってきた胸の大きな魅力的なお姉さんが、水ぼうそうにかかったのだ。

【1】そこから事態は、思わぬ※様相を呈しはじめる。【2】繰り返すようだが、派手でも精巧でもなく、※奇想天外でもない様相なので、私が詳しい説明をしたとしても、きっと多くの人は※拍子抜けするだろう。【3】だからここでは何も説明しない。【4】ベートーベンの難聴も知らなかった少年が、その瞬間に、教科書にも載っていない、言葉でも説明できない何かを、はつきりと知ったのだ。誰かが見出し、言葉を与えなければ忘れ去られてしまう、日常の中のささやかな奇跡を、エリザベス・ギルバートは救い出した。ほんの数ページの中でそれをやってのけた。何度読み返しても私は、感動に震えながら、途方に暮れて立ちすくみながら、※と自分自身に向かつてささやいてしまう。作家は奇跡をでっち上げるのではなく、見つけ出すのが仕事なのだ、と思う。そう思わせてくれるような小説かどうか、私にとつての基準となっている。

よく、短編と長編と、どちらが得意ですか、と聞かれる。私はどちらも不得意です、と答える。短編であれ長編であれ、小説を書くのは難しい。とても、どちらかが得意です、などとは答えられない。短編を書くにはそれに相応しい技術が必要だと考えられているのなら、それは間違いだと思う。でっち上げたのではなく、見つけ出した物語を描くこと、ただそれだけが大切で、必要なことなのだ。書けなくなつて辛くなると、私は裏庭の泉へ走り、宝石箱の鍵を開ける。III また自分だけの秘密を底に沈め、書きかけの小説の前に戻る。③ そんなことを繰り返しながら書き続けている。

( 小川洋子『博士の本棚』所収「泉に沈める宝石箱」 )

※(文中のことばの意味)

威勢よく … 激しい勢いで。

エリザベス・ギルバート … アメリカの小説家。

独占欲 … 独りじめしたいという気持ち。

途方に暮れてしまう … どうしてよいか手段に迷う。

斬新な … 発想がとても新しい。

精巧な … 仕組みが細かくよくできている。

細胞の有糸分裂 … 細胞が分かれる現象の一つ。

様相を呈しはじめる … 状態になりはじめる。

奇想天外 … 人をあつと言わせるほど変わっている。

拍子抜けする … てごたえがないと感じる。

問1  I  III にあてはまることを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |   |   |      |    |      |     |       |
|---|---|------|----|------|-----|-------|
| ア | I | だが   | II | あるいは | III | したがって |
| イ | I | やはり  | II | たとえば | III | さらに   |
| ウ | I | しかし  | II | つまり  | III | そうして  |
| エ | I | すなわち | II | また   | III | ところが  |

問2  A  C にあてはまることを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |   |   |    |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|
| ア | A | 長編 | B | 短編 | C | 長編 |
| イ | A | 長編 | B | 長編 | C | 短編 |
| ウ | A | 短編 | B | 短編 | C | 長編 |
| エ | A | 短編 | B | 長編 | C | 短編 |

問3 ——— 線① 「自分の庭に隠しておいた宝物が役に立つ」とは  
どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選  
び、記号で答えなさい。

- ア 長編を読むような元気がない時でも、短編を読めば、自分だ  
けの宝物に触れ、安心できるということ。
- イ 疲れ果ててしまった時でも、短編を読めば、人間の営みに触  
れ、心を落ち着けられるということ。
- ウ 長編をうまく読め進められない時でも、短編を読めば、長編  
を読む元気が出てくるということ。
- エ 人間の営みが嫌になった時でも、短編を読めば、人間の営み  
の暖かさを確かめ、気持ちが奮い立つということ。

問4 X にあてはまることばとして、最もふさわしいもの  
を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア デニー・ブラウン
- イ ベートーベン
- ウ 友だち
- エ お姉さん

問5 ——— 線② 「こんなにすごい作品」とありますが、筆者はど  
のような点を「すごい」と言っているのですか。最もふさわし  
いものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 作家である自分を、自分は何をどう書けばよいのだろうと、  
途方に暮れさせた点。
- イ 腰を抜かすような斬新なテーマを扱っておらず、精巧な仕掛  
けを張り巡らしてもいない点。
- ウ 小説のほぼ三分の二が、主人公が何を知らないかについての  
描写に費やされている点。
- エ 忘れ去られてしまいそうな日常の中のささやかな奇跡を見出  
し、言葉を与えている点。

問6 文中から、次の一文がぬけています。どこにあてはめるのが  
ふさわしいですか。文中の【1】～【4】から一つ選び、数字  
で答えなさい。

ただ一つはつきりしているのは、水ぼうそうの彼女かのじよの手を引き、  
バスルームへ向かうデニー・ブラウンは、人間の心の最も深遠  
な部分に触れた、ということだ。



① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

五年生のハル(私)の父親は二か月くらい前から家に帰って来なくなつた。夏休みのある日、父親が突然ハルの前に現れて、「ユウカイする」と言つてハルを連れていく。それから数日二人は海で泳いだりキャンプをしたりと、お金の心配をしながらも旅館や寺に泊まり旅を続けていた。そして父親は母親との電話の後、「取引は成立した」と言つてハルを母親のいる家へ連れて帰ろうとする。

駅についておとうさんは切符を買う。日なたに立ち、太陽の攻撃を受けながら、なんと言うべきか考える。もつと逃げよう、そう言つたらおとうさんはなんと言うだろう。今度は私がユウカイ犯になる。きみにはある程度自由はあるけれど、主導権は私にあるんだから。でも、主導権を握つて私はどうしたらいいんだらう。

切符を買つたおとうさんがこちらを向く。お財布におつりをしまひ、買ったばかりの切符を見ながらこちらに歩いてくる。のどの奥がⅠにかわいている。心臓がⅡになつて体じゅうに散らばつてしまったみたい、体全部、どこもかしこもⅢしている。「一時三十五分だつて、あと二十分くらいあるけど、どうする、なんか食うか」

おとうさんがきき、私はふいと横を向く。

「混んでるみたいだから、ホームでならんでるか」

おとうさんは改札に入つていつてしまふ。しぶしぶあとについていく。

ホームは人でいっぱいだった。みんな夏休み特有のにおいを発散している。日に焼けた子供たちが走りまわり、おかあさんたちがどなり、おとうさんたちは眠たげに新聞を読んでいる。カップルは真冬のさなかみたいにべったりとくっつき、グループ連れは大声で話

しあう。おとうさんは私を家族連れのうしろにやらせ、ジュースと弁当を買つてくると言う。

「ジュース、何がいい？ 炭酸か、果汁か」

おとうさんがきくが私は横を向く。

「ときとうでいいな」

おとうさんは言い残して去つていく。私がおとうさんの段取りの悪さとかかつこ悪さになれたように、おとうさんも①不機嫌モードになれてしまつたらしい。無視なんて、ずっと前、最初に電車に乗つたときにやつた方法と同じじゃないか。進歩してない自分がうらめしいが、どうしたらいいのか私にはわからない。おとうさん私はオレンジ、炭酸入ったオレンジじゃないよ、それからビールはやめときなね、トイレいきたくなくなるからね、なんてにこにこ笑つて言う気分になれそうもない。

私の前にならんでいる家族連れの、おとうさんとおかあさんはホームにすわりこんでいる。山歩きをしてきたらしく、二人ともリュックを背負い、登山靴をはいている。子供はおにいちゃんや二年生くらい、妹が幼稚園くらいで、両親のまわりをぐるぐる走つて笑い転がっている。私に気づいたおにいちゃんや、両親の陰に隠れて、あかんべをしてきたり、イーだと歯を見せたりするけれど、やりかえず余裕が私にはない。妹もまねをして、あかんべ、イーだをくりかえす。両親はこちらに岩のような背中を向けたきり動かない。ばーか、と私に向かつておにいちゃんやんは口を動かす。その横で妹は狂つたようにあかんべをしている。

② いいなあ。ふと、そんなことを思う。

一分たりとも遅れずに電車はホームについた。人の波にもまれるようにして電車に乗りこむ。ぎゅうぎゅうづめだ。私はおとうさんのおなかに顔を押しつけていなければならぬ。弁当どころじゃないな、頭の上でおとうさんの声がきこえる。電車が走り始める。すぐ近くで女の人が※金切り声に似た笑い声をあげている。きつ

い香水のにおいもする。かと思うと唐揚げの湿ったにおいもする。赤ん坊の泣く声はどこからきこえてくる。

「だいじょうぶか、息、できてるか」

おとうさんの声がその合間から降ってくる。

無視なんかじゃだめだ。不機嫌なまま、黙っていたら家まで連れていかれてしまう。何か、何か言わなければだめだ。私はおとうさんのおなかに顔をこすりつけるようにして、上を向く。おとうさんと目があう。

「おとうさん、私、少しなら貯金がある。子供の頃からのお年玉、ほとんど使ってなくて、おかあさんがいつも郵便局に預けてくれるんだよ。だから少しじゃないかもしれない。それ、使ってもいいよ、だから、さ、このまま」

私のとなり立っていた、おなかのつきでたどこかのおやじが私を見おろす。かまわず続ける。

「おかあさんには私が電話する。貯金通帳送って電話する。だめだつて言うと思うけど、なんか言っておどして送らせる。だから」「しいつ」おとうさんはデブおやじの視線に気づいて指を口にあてた。

「A」私は少しだけ声を落とす。

おとうさんを見あげるが、おとうさんは首をふる。もう逃げる必要はなくなったんだよ、と、かがんで小さな声をだす。

電車が駅にとまり、人がおり、少しだけ体のまわりにスペースができる。おとうさんのおなかから顔を離して息を吸いこむ。背伸びをして車内を見まわすと、あかんべきようにその両親はしっかりと席にすわっている。女の子のほうはおかあさんの膝に顔を埋めて眠ろうとしていた。電車はまた、走り出す。

「つぎの駅できつとまた人がおりするから」

そう言うおとうさんの声をさえぎって、私は言った。

「私きつとろくでもない大人になる」

「え？」おとうさんがかがみこんで私の口に耳を近づける。私はもう一度くりかえした。

「私はきつとろくでもない大人になる。あんたみたいな、勝手な親に連れまわされて、きちんと面倒みてもらえないで、こんなふうには、③ いいにおいのするおいしそうなものを鼻先に押しつけられて、ぱつと取りあげられて、はいおわりって言われて、こんなことされてたら私は本当にろくでもない大人になる。自分たちの都合で勝手に私のことを連れまわして。おとうさんのせいだ。おとうさんたちのせいだからね」

私は泣かなかった。思いつきりかんだわさび漬の味が思い起こされたけれど、涙はでてこなかった。顔が赤くなるのがわかった。私は猛烈に怒っているのだと、心のどこかで思っていた。

私の訴えについておとうさんは何も答えなかった。じつと私を見おろしていた。おとうさんが目をそらさないで私もそらさなかつた。つぎの駅が近づくとおとうさんはふいに私の手をとり、

「おりよう」

低く言って引っぱった。

つぎの駅でもまたたくさんの人がおりた。おりて、おとうさんが私の願いをきき入れて、またどこかへいくのだと思っていたが、おとうさんはホームに突っ立ってじつと私を見ている。人々は笑い声をあげながらずらずらと改札に向かい、あつという間に私たちだけが取り残される。

「お、おれはろくでもない大人だよ」

片手に飲み物の入ったビニール袋、片手にお菓子とお弁当が入ったビニール袋を持ったおとうさんは、私の前に仁王立ちになってそう言った。④ 何を言われているのかわからなくて、私はおとうさんを見あげた。

「だけどおれがろくでもない大人になったのはだれのせいでもない、だれのせいだとも思わない。だ、だから、あんたがろくでもない大

人になったとしても、それはあんたのせいだ。おれやおかあさんのせいじゃない。おれはあんたの言うとおりの勝手だけど、い、いくら勝手に無責任でどうしようもなくても、あんたがろくでもなくなるのはそのせいじゃない。そ、そんな考えかたは、お、お、おれはきらいだ」

おとうさんは興奮しているらしく、最後のほうでどもった。

「きらいだし、かつこ悪い」

私はおとうさんを見ていた。おとうさんが黙るとあちこちでせみの鳴きわめく声がきこえた。

「責任のなれがしたいんじゃない。これからずっと先、思いどおりにかないことがあるたんびに、な、何かのせいにしてたら、<sup>⑤</sup>ハルのまわりの全部のことが思いどおりにいかなくてもしようがなくなっちゃうんだ」

おとうさんはそこで言葉を切った。そしてビニール袋からオレンジジュースを出して、乱暴に私に押しつけた。人のいないホームで向きあつたまま、おとうさんはビールを、私はオレンジジュースを飲んだ。ジュースはぬるくなって、よけい甘<sup>あま</sup>つたるかった。せみが鳴き、鳴きやみ、また鳴いた。

B

おとうさんは口のはしにビールの泡<sup>あわ</sup>をつけて言った。小さな子供がえぼつて宣言しているみたいなきこえた。

「私も楽しかった」

小さな声で、私は言った。

おとうさんがビールを、私がジュースを飲みおわったときつぎの電車がすべりこんできた。たくさん人はおりたけれど、それでも車内は混んでいた。さっきの電車がもう一度きたのではないかと思うほど、さつきとよく似た人たちが乗っている。相変わらず赤ん坊の泣き声がきこえ、香水とサン・オイルと唐揚げのにおいがした。座

席にすわった、日に焼けた子供たちは眠りこける両親の合間でちょっかいをだしあい、髪<sup>かみ</sup>の長い女の人が男の人に寄りかかって口を開けて眠り、おしゃぶりをくわえた小さな子供がおかあさんの胸で眠っていた。混んだ電車の中、おとうさんは私の手を握った。私も握りかえた。

いいにおいのするおいしそうなものを鼻先に押しつけられて、ぱつととりあげられたんじゃない、私はそれを、心ゆくまで食べたんだ、たらふく食べたんだと、急に思った。電車は右に揺れ左に揺れ、子供たちの歓声<sup>かんせい</sup>と女の人のかん高い笑い声<sup>わひび</sup>が響き、<sup>⑥</sup>私とおとうさんはしっかりと手を握りあつて立っていた。

( 角田光代 『キッドナップ・ツアー』 )

※ (文中のことばの意味)

金切り声 … 金属を切る時に出るような高く鋭<sup>すど</sup>い声。

問1  I  III にあてはまることばの組み合わせとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |   |   |      |    |      |     |      |
|---|---|------|----|------|-----|------|
| ア | I | がちがち | II | ばくばく | III | どきどき |
| イ | I | がちがち | II | ばらばら | III | じんじん |
| ウ | I | からから | II | ばくばく | III | じんじん |
| エ | I | からから | II | ばらばら | III | どきどき |

問2 ———— 線①「不機嫌<sup>ふきげん</sup>モード」とありますが、それを表す具体的な行動を、ここより前の文中から四字でぬき出しなさい。

問3 ———線②「いいなあ」とありますが「ハル」は何がいいと思っただのですか。最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 登山のために、リュックや登山靴を買ってもらえること。
- イ 悪さをしても、全くしからない優しい両親やまがいること。
- ウ 両親がいて、そのそばで安心して遊んでいられること。
- エ 一緒に遊んでくれる、優しい兄がいること。

問4 Aには同じことばが入ります。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 乗ってよう
- イ 逃げよう
- ウ 使おう
- エ 立ってよう

問5 ———線③「いいにおいのするおいしそうなものを鼻先に押しつけられて、ぱつと取りあげられて、はいおわり」とありますが、この表現は具体的にどのようなことを表していますか。「こと」につながるように、三十字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問6 ———線④「何を言われているのかわからなくて」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 電車からおりた時点で「ハル」の願いは「おとうさん」にきき入れられ、次にまたどこかへ行くのだと思って安心していたのに話を蒸し返されたから。
- イ とにかくおなががすいて、「おとうさん」が電車を「おりよう」と言ったので、やっとお弁当が食べられると食べ物のことばかり考えていたから。
- ウ 「ハル」が電車の中で言ったのは、「おとうさん」が「ろくでもない人間になる」のではなくて自分がそうなると思ったのに勘違いされたから。
- エ 「ハル」の訴えに「おとうさん」は何も答えなかったので、「おとうさん」のようにひきょうで信頼しんらいできない大人にはなりたくないと思っていたから。

問7 ——— 線⑤ 「ハルのまわりの全部のことが思いどおりにいかなくてもしようがなくなっちゃうんだ」とありますが、「おとうさん」は何を伝えたかったのですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 勝手に無責任な大人になるのはかっこ悪いので、自分はいつも正しいという自信を持っておくべきだということ。

イ 「おとうさん」は無責任な人間だが、「ハル」がろくでもない大人になるのは「おとうさん」のせいではないということ。

ウ 物事がうまくいかない時に、自分以外に責任を押しつけたり何かのせいにしたりするのはいくつかのこと。

エ 自分がろくでもない大人になるかもしれないからといって、それを「おかあさん」のせいにするべきではないということ。

問8

□ B □に入る「おとう

さん」のことで、最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おれはこの数日間楽しかった気がする。ハルはあまり楽しくなかったのかな。

イ ごめんな。でも楽しかったな。いっぱい連れまわして疲れただろう。

ウ ハルと一緒に楽しかったよ。けれど二人ともずいぶん疲れたよな。

エ おれはこの数日間ものすごく楽しかった。ハルと一緒に楽しかった。

問9 ——— 線⑥ 「私とおとうさんはすっかり手を握りあって立っていた」とありますが、この時の「ハル」はどのような気持ちですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「おとうさん」に家に連れて帰られてしまふけれど、この旅でおいしいものを食べ楽しい思い出もたくさんできた。たとえ旅が終わってしまったとしても、この電車に乗っている子供たちには負けないすばらしい絵日記が書けそうだと自信にあふれた気持ちを持っている。

イ 「おとうさん」との旅の終わりで気持ちの整理がつかず、不機嫌になったり怒りを感じたりしていたが「おとうさん」と一緒に旅が自分にとつてとても楽しいものだったことに気づくことができた。「おとうさん」との絆を感じながら満ち足りた気持ちになっている。

ウ 「おとうさん」に家に連れて帰られてしまふけれど、母も自分のことを愛してくれているのでその生活も大切にしなければならぬ。たとえ、他の家族がどうであれ、自分は自分なのだから早く自立して自分の思うように生きていきたいという決意を持っている。

エ 「おとうさん」との旅は終わってしまったけれど、また次があるのを期待してそれを楽しみにしようと思っている。たとえ他の乗客に何とかわれようと私は「おとうさん」のことが好きだから堂々と手をつなぎ残り少ない時間をかみしめたのだという気持ちになっている。

三 次の各文から主語にあたる部分を記号で答えなさい。

- ① ア彼は イ英語が ウ一番 エ得意だ。
- ② ア私も イお母さんと ウ買い物に エ行きたい。
- ③ アクリスマスこそ イ家族で ウ過ぎすべき エ日だ。
- ④ ア教室には イもう ウだれも エ残っていない。
- ⑤ ア昨日、イ小学校の ウ先生から エ手紙が オ届いた。

四 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ① 牛乳をレイゾウ庫で保管する。
- ② 国に税金をオサめる。
- ③ お中元をユウソウする。
- ④ 良心をウタガう。
- ⑤ 底辺からスイチヨクに線をひく。
- ⑥ 業務にシヤウをきたす。
- ⑦ 大規模な交通規制がかけられる。
- ⑧ リンキ応変に対処する。
- ⑨ 自分の意見をはっきりと述べてタクのある人だ。
- ⑩ クニシさが認められ、リーダーに選ばれた。

これで問題は終わりです。